2012年（平成24年）10月18日木曜日

別府小新聞

学ぶ・教わる・知る

加古川市　6年生7人が取材し、協力してつくりました

食事に感謝する心を育もう

私たちの加古川市立別府小学校は、市の南東部に位置し、すぐ近くに播磨灘が広がっています。今年で創立120周年を迎え、12月1日には記念行事も行われる予定です。教育目標は「かしこい子　やさしい子　たくましい子」で、児童たちはそんな「別府っ子」になれるよう頑張っています。昨年からは、家庭科や総合的な学習の時間を使って「食を中心に豊かな心と健康な体を育む」をテーマに、全校児童で食育に取り組み、6年生は米作りや甘酒、味噌造りも体験してきました。

ほっとニュース

食育の勉強を始めたのは、毎日食べている料理が、私たちの健康を維持する大切なものであることを、深く知りたいと考えたからです。そのために▽食品の製造、販売には様々な基準があることを知る▽品質や安全性などを考えながら選ぶ力を身につける▽地域に伝わる食文化の良さや背景を知り、後世に受け継いでいく――などに取り組んでいます。食育はふだんの生活に深い関係があり、児童たちは興味を持って学習しています。

6年生が5年生だった今年2月、味噌や甘酒を造っている「小松屋」（姫路市白浜町）の肥塚雅実さん(69)らの協力で、学校で味噌造りに取り組みました。糀を手でもみほぐし、蒸した大豆に塩や仕込み水などと一緒に入れて、混ぜ合わせました。

7か月間、日陰に置いたおけの中で熟成させると、9月には香りのいい味噌ができあがりました。油揚げやタマネギを入れて味噌汁にし、みんなで試食しました。自分たちで作った味噌は格別で、児童たちは「おいしい」と声を上げて喜んでいました。

総合的な学習の時間では、日本の伝統食について調べました。酒造りやちりめんじゃこ作りの場を見学したり、生産者に話を聞いたりしました。こだわりをもって仕事をしていることや商品への深い思いがあることを知り、昔から食べられてきた食品の長所や、播磨灘で新鮮な魚がとれるありがたさも学びました。

活動を通じ、毎日の食事がどれほど大切で、栄養バランスを考える必要があるかが分かりました。いつもバランスを考えて食事を作ってくれる母親や給食の調理員への感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。

6年の牧野真弦さん(12)は「味噌が体に良いことを知り、家でも自分で味噌料理を作るようになりました」と話していました。

市場には多様な食品があふれています。ふだんは何気なく食べている食品でも、加工方法、産地、材料などで値段や品質などが変わるということに気付きました。今後は学んだことを生かし、自分たちの食生活をしっかり考えていきます。

（岡本泰知、北川未来、滝川凌平、竹田香穂）

米や糀をつぶして甘酒を造る児童たち

データ　加古川市別府町西町1。1892年創立で、児童数は422人。

伝統を受け継ぐ手作り製法

聞かせて

――仕事内容を教えて下さい。

1877年（明治10年）に創業し、130年以上変わらず、無添加の製法で糀や味噌、甘酒などを造っています。

――こだわりは何ですか。

味噌や甘酒のもととなる糀造りにこだわり、昔ながらのせいろを使って仕上げます。特に温度管理が大変。気候などによって発酵の進み具合も変わるので、造り始めてから完成までの4日間、昼夜関係なく糀の状態に注意を払います。わが子を育てるように真心を込めています。

――なぜ、私たちに味噌造りを教えてくれるんですか。

若い世代の人たちに日本伝統の食べ物に親しんでもらいたいからです。今は食卓の味噌離れなども言われていますが、味噌は健康にとても良いとされています。味噌だけでなく、手間暇をかけて作られた食べ物の素晴らしさを知ってほしいと思っています。

――今後の目標は何ですか。

伝統のせいろを使った手作りの糀を造り続け、日本の代表的な発酵食品として味噌などを未来に継承したいと考えています。

（井上雅貴）

伝統の製法で味噌などを造り続ける「小松屋」4代目店主　肥塚　雅実さん　69

記者から

今回、児童たちが選んだ取材のテーマは食育。学校の廊下には、味噌汁を作ったり、鮮魚店を見学したりした児童の感想文や写真などが掲示されていました。どの写真の児童も楽しそうな表情をしており、食育の授業が児童たちにとって貴重な体験だったことが伝わってきました。

それだけに、児童たちの原稿にも熱が入っていました。取材スタッフの岡本泰知君は「野菜があまり好きではなかったけど、授業を受けてから頑張って食べるようになった。たくさんの人に食育の魅力を知ってほしいんです」と気合十分。北川未来さんは「どうやったらうまく伝わるのか。書き上げるまでに3日間かかりました」と話していました。

原稿には何度も消しゴムで消し、書き直したあとが残っていました。試行錯誤しながら取材、執筆に取り組む児童たちの一生懸命な姿勢に背筋が伸びる思いでした。

この新聞作りも、子どもたちにとって大切な経験になってもらえたらと思います。

（村山卓也）

取材スタッフの児童たち

学ぶ・教わる・知る